

論語を英語で読んでみようー2

大阪大学名誉教授 長谷川 晃

1月号に続いて論語の名文を英語で読んでみよう。前号では論語第一巻の中の学而からの抜粋を紹介した。今回からは訳者 Arthur Waley 氏の章立てに基づいて論語全体の章立てを現代風に改めることにする。日本語版の論語では巻第一、巻第二、巻第三、、、巻第十までと順次巻付けにし、その各巻の中を二つづつに分けて巻第一の中に、学而第一、為政第二、続く巻第二の中に八佾三、、、といったタイトルをつけるのが普通のようなのだが、この章立ては現代風にはなじまないと思われる。各章に学而、為政、八佾、、、などの名称をつけ、その後に通し番号をつけるのは実際無意味で、各章の名称を使うのであれば、その名称の前に通し番号をつけるべきである。英訳では巻第一の学而第一を Book 1, 続く巻第一の為政を Book 2... と通し番号をつけていて、現代風でわかりやすい。この号からは英訳の章立てを参考にしながら、各章の名称に通し番号を付けて記述することにする。今回は第一巻の次の章である「為政」とその次の第二巻の八佾からの抜粋を使うことにする。「為政」のタイトルはこの章の最初の文にある、「子曰、為政以德、」つまり政をなすには徳を以てすれば云々から来ている。まずはよく引用される為政 2-4 の文章から始める。

2. 為政-4

吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而从心所欲、不踰矩。

この文の和訳はよく引用されるので例外として記しておく。吾十有五（じゅうゆうご）にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳に従う。七十にして心の欲する所に従えども、矩（のり）を踰（こ）えず。

初めに吾とあるから孔子自身の体験をものがたっている文であろう。それでは Waley 氏の英訳を見てみよう。

The Master said, at fifteen I set my heart upon learning. At thirty, I had planted my feet firm upon the ground. At forty, I no longer suffered from perplexities. At fifty I knew what are the bidding of Heaven. At sixty, I heard them with docile ear. At seventy, I could follow the dictates of my own heart; for what I desired no longer overstepped the boundaries of right.

論語でよく使われる而は「しこうして」と読み、物事の結果を表すように思う人が多いが、本来の意味は英語で as well as に近く、「同時に」を意味する。「学に志す」を I set my heart upon learning としている。学に志すは学者になろうと決めたと解釈できるが、Waley 氏の英訳は学ぶことに心を決めたとしている。和訳のニュアンスとは全く意味を異にするが英訳の方がわかりやすい。

「三十にして立つ」もよく引用される文だが、日本語では自分の足で立つ、つまり独立する、と解釈できる。

「孔子はんは30でっか、私なんか15で立ってまっせ」と言う声が聞こえて来そうなので英訳を見てみよう。Waley 氏は原文の文字通りに、しかも、具体的に、I had planted my feet firm upon the ground. つまり、足を地上に植え付けたとしている。多くの人は大学を卒業し、あるいは大学院で修士課程、博士課程を修了し、社会人となってそろそろ自分の仕事が見えてきた年頃だ。その内容はそれぞれ人によって異なるだろうが、30歳になっても、自分の進むべき道が見つからず、食うためにフリータなんかしてうろうろしてはいけない。これと決めた道に進んで自分というものをそこに見出さねばならない。その道が間違っているかどうかで悩まず、とりあえず、自分が決めた道を懸命に進むこと、このことが立つという意味だろう。「立つ」で初めて人生というものが見えてくるものだ。何事でもその道のエキスパートを志すことが肝心である。これが立つという意味だ。

そして有名な40歳、「不惑」の年に移ろう。この意味については以前にもテクノネットで書いたことがあるが、「惑わず」とは孔子自身が惑った時期があり、それを乗り越えたと言う意味に解釈できる。つまり、人生40に近づくと誰もがそれまでの人生を振り返り、これでよかったのだろうか、思案する年頃になる。また、思案しなければいけない。比較的順調に成功し、会社では課長とか部長の地位につき、また、自分らしい仕事も完成し、子供もティーンエイジャに近づき一応人生を確かにした人も多いだろうが、しかし、がむしゃらに進んできた人生を、一旦立ち止まり、これでよかったのだろうかと思う時期でもある。それまで人生が順調でなかった人も、なんとかしなければと、やはり、振り返る年でもある。

40前後の年を英語では identity crisis の時期と呼ぶ。自分自身の identity, 独自性、に悩む時期とされている。不惑とは、こうした惑いを乗り越えたと言う意味だろう。この意味で三十而立とは微妙に意味の違う言葉である。三十にして立つはがむしゃらにこれで行こうとすることだが、不惑は、そのガムシャラを問い直すと言う意味になる。30歳で自分の道を見つけ、これだと決めて10年間ガムシャラに生きて来て、ふと立ち止まるのが40歳と言うことだろう。そしてさらにその惑いを乗り越えることができれば、不惑の年に入る。英訳では I no longer suffered from perplexities. としている。perplex とは困惑を意味する言葉で、困惑からの苦しみを卒業したと言う意味になる。つまり「迷いを乗り越えた」の意味に解釈している。

次の「天命を知る」はどうだろう。天命は the bidding of Heaven と訳されている。bidding は元来「入札」の意味を持つ言葉だが、誰かからの要求や、命令の意味も持つ。ここでは後者の意味に使われている。天命を知るは、「もう分かった」と一種の悟りの境地なることだろう。

それでは、惑わずと天命を知る、とではどう違うのだろう。以前にも言ったと思うが、不惑を乗り越え、人生に確信を持つことは、そのまま、天命を知ることではないか？以前、この疑問を私の師である大徳寺の故小堀南嶺老師に伺ったことがある。老師の答えは、素晴らしく、おそらく読者の参考にもなると思われるので紹介しておこう。不惑を乗り越え、自分の生きる道に確信ができた後10年後に、天命を知ると言うことは、その体験を他人と分かち合うことだとおっしゃった。例えば研究者であった場合、自ずからの研究成果に満足し、自信を覚えることが不惑と言うことであるが、その体験を世の中に広めること、つまり、教育に携わることを意味する。逆に言えば、五十を過ぎるまでは偉そうに人に物を教えるなどと言う意味にも取れる。自ずからの2本足で立ち、不惑を乗り越え、さらに10年経た後に始めてまともな教育ができるのだと言う意味だ。会社勤めの人にも、自分で事業を起こした人にも同様にこのことは当てはまる。それまで無我夢中で働いた経験をベースに始めて世のため、人の為に役立つことができる、或いは後輩の指導にあたるようになる、と言うことだ。この三項目は極めて含蓄のある言葉でみなさんの参考に使っていただきたい。I knew what are the bidding of Heaven に似た表現がよく使われるフレーズに、I know what I am doing という言い回しがあるので覚えておくのがいい。

続く「六十而耳順」はどうだろう、和訳はそのまま、耳に従うとしているが、英訳は I heard them with docile ear となっている。docile とするのは “ready to accept control or instruction” つまり、制御や教養を受入れるこ

とを意味する言葉だが、docile ear はそうした耳を持つに至ると言う意味だろう。六十を過ぎると、往々にして頑固になり、自説を押し通そうとする。孔子はこうした態度を否定し、相手の言うことを素直に聞き取れと言っている。これは天命を知る後に到達できる心境なのだろう。還暦を過ぎた頃には人の話を素直に、ちゃんと聞きなさい、と言うこと、心すべきことだろう。hear with docile ear とはうまく訳したものだ。follow what you hear ではないのだ。

最後の七十歳の和訳は「心の欲する所に従えども、矩(のり)を踰(こ)えず」となっているが、英訳は I could follow the dictates of my own heart; for what I desired no longer overstepped the boundaries of right としている。follow the dictate は指示に従うと言う意味で、この文は自身の心に指示に従う、と言う意味だ。心のおもむくままに行動しても、矩(のり)を超えず、矩とは直線とか矩形を表す語だが、英訳は boundary of right としている。つまり権利の境界、を意味する。矩を越えずと言う漠然とした意味を「もはや、私の望むところは、権利の境界を踏み越えることはないのだから」と明確に訳している。

英訳を読むことでなんとなく曖昧な和訳の意味が極めて明確になることがお分かりいただけたらうか。

それでは続く論語の各章を順番に追いながら、よく引用されている箇所を選んで英訳を参考に紹介しよう。

2. 為政一6

孟武伯、問孝、子曰、父母唯其疾之憂

この文は孟武伯(もうぶはく)が「孝」とは何かを子曰に問うた時の孔子の答えを表し、父母は唯其の疾(やまい)を之れ憂う、つまり、健康であることが何よりの親孝行だと答えている。以前にも述べたが老子が母性社会を代表する哲学者であるのに対し、孔子は父性社会を代表する人で論語の中で親という場合は父親を指す場合が多い。老子は母という言葉をよく使うが父は出てこない。一方、論語の中で母という語が単独で出てくることはなくて、常に父母として出てくる。対照的で面白い。

Waley氏の英訳は Men Wu Po asked about the treatment of parents. The Master said, Behave in such a way that your father and mother have no anxiety about you, except concerning your health. としていて、唯という語をさらに具体的に英語で表現している。つまり、孝行とは父母にあなたの健康以外には何も心配させないことだと訳している。何よりの親孝行は自分が健康であることだと言うのは今なお変わらない不変の事実だろう。

2. 為政-10

子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉、

この文は、孔子が人物評価をする方法を述べているもので、最後の人焉廋哉は人（ひと）、焉（いづく）んぞ、廋（かく）さんやと読む。廋すは隠すと同じ意味だ。まず、視其所以のWaley氏の訳はLook closely into his aimsである。視をlook closely intoと訳している。所以はゆえん、つまりその人が何を目標しているかを意味する。

続く観其所由はその由（よ）るところを観るだが、英語訳はobserve the means by which he pursues them, としている。観るはobserve, つまりじっくり観察するである。そして「由る」は the means by which he pursues them, つまりthemその目的をいかに遂行するかと訳している、meansは方法という意味だ。そして、察其所安、その安んずるところを察（み）は、discover what brings him content - と訳している。安んずるところはbring him content, つまり満足を得ることと解釈している。具体的にわかりやすい。つまり、その人物を知るにはその人が何を目標しているかを視て、それを追求する方法をつぶさに観、さらにその人が何を持って満足するかを観察すればわかると言っているのだ。そうすれば、その人の本質を見抜くことができる。というわけだ。

2. 為政-12

子曰、君子不器。

この文は「君子器（うつわ）ならず」と訳されてよく引用される。

Waley氏はこの文をThe Master said, A gentleman is not an implement. と訳している。implementは含蓄のある語で、よく動詞として使われる語である。動詞の場合は「(法を) 施行する」とか「実行する」という意味を持つ。名詞は文字通り「器」の意味も持つ、が、道具などがその本来の意味だ。そして注釈としてspecialistではいけない、つまりある特別の目的のためだけの存在ではいけない、としている。この文は君子は「道具」ではない、と読むか、誰かの道具になってはいけない、と読むかで意味を異にする。ここではこれを君子の定義の一つの表現と見るべきだろう。つまり、君子はある限られた枠の中での人間であってはならない、という意味に解釈するのが正しいだろう。

2. 為政-13

子貢問君子、子曰、先行其言、而後從之。

これは孔子の弟子の一人の子貢が君子とは何かと孔子に問うた時の孔子答えである。君子の英訳は以前に述べ

た通り、gentlemanである。孔子の答えは君子とは先行其言、つまり、まず言うことを行い、その後これに従う、（而後從之）であるが、その意味はいささか曖昧だ。Waley氏はここをhe does not preach what he practises till he has practised what he preaches. とうまく訳している。この訳は自ずからが言ったことを実行するまではその行動に関する説教はしない、でわかりやすい。君子とは人に説教する場合はその説をまず実際に行動に移し、然るのちにそれについて説教するという意味である。つまり実際に実行もせずに頭だけの知識で人に説教をするなどということだ。

2. 為政-14

子曰、君子周而不比、小人比而不周。

この文も君子に関する孔子の定義である。この文の「周」は周り、すなわち、全ての方向を意味する。君子周而不比の訳は A gentleman can see a question from all side without bias, である。つまりwithout bias、偏見を持たずに問題を全ての面から見ると訳している。これに対し、小人は is biased and can see a question only from one side. と偏見を持ち、問題の本質をその一面からしか見ない、と言う。

2. 為政-15

子曰、学而不思則罔。思而不学即殆。

この文は、「学びて思わざれば、則（すなわ）ち罔（くら）し。思いて学ばざれば、則ち殆（あやう）し」と読んでこのままでわかりやすいように見える、しかし英訳はThe Master said, 'He who learns but does not think, is lost.' He who thinks but does not learn is in great danger. となっていて和訳の曖昧さを払拭している。たとえば、思をThinkとすることで考えるという意味を持たせ、意味がはっきりする。つまり学ぶだけで学んだことについて考えないと意味ないよ、と言っていて、今なお役たつ言葉だ。意味もわからず丸暗記するのは学んだことにならない、よく言われることだが、全くその通りである。続く思而不学即殆はこの逆で、勝手に考えるだけで学ぼうとしないのも危うい、と言うことになる。つまり、考えるだけで学ぼうとしないのは危ない、これは学生だけではなく、たとえば、オリジナルワークを達成したと思っても、同じ成果がすでに他人によって発表されていることを知らないことは危ないのだ。紀元前500年の言葉が今も生きている。研究成果を発表する場合に心がけたいものだ。

為政の章の最後の引用に移ろう。

2. 為政-24

子曰、非其鬼而祭之、諂也、見義不為、無勇也、

この文の後半の「義を見て為ざるは、勇なきなり」はよく引用される論語の文である。しかし、この文の前半に非其鬼而祭之、諂也、つまり其の鬼（き）に非ずして之を祭るは、諂（へつら）いなりがあることはあまり知られてない。

この文を解釈してみよう。この文の英訳は Just as to sacrifice to ancestors other than one's own is presumption, となっている。なかなか微妙である。ここの presumption は本来、想定することを意味するが、ここでは厚かましいと言う意味を採用すべきだろう。その鬼を先祖の魂と訳している。つまり自ずからのご先祖の御霊意外を祀るのはよくないと言う意味だ。後半の義を見て為ざるは、勇なきなりと併せて読めば、余計なことはするべきではないが、と言って、義を見ながらにして行動に移さないのも良くないということになり、全体の意味がはっきりする。

続いて巻第二に入ろう。この巻の初めの節は八佾（はちいつ）というタイトルを持つ。八佾とはこの巻の最初に出てくる言葉で八列のことを表す。初めからの節を数えると第3節になるのでこの節は八佾三と呼ばれている。まず3. 八佾の3から始めよう。

3. 八佾-3

子曰、人而不仁、如禮何、人而不仁、如樂何。

この節は論語で孔子が重要視する、人間が本来持つべき「仁」に関するものだ。仁を具さない人間は礼や楽（がく）などどうしてくれよう、と孔子が人間として備えるべき礼、また楽（音楽だけではなく品性などを言う）を備えるにはまず仁を持たねばならないと言っている。さて仁だが、その意味するところは、人偏に二と書くことから、人が2人居ればお互いに相手のことを考え、相手に人としての愛情を注ぐことを言い、儒教の根本となる言葉である。Waley氏は仁を大文字のGを使って Good と訳している。goodの固有名詞だ。これは逆に英語のgoodの持つ意味の理解にもなる。英文として、The Master said, A man who is not Good, what can he have to do with ritual? A man who is not Good, what can he have to do with music? としている。ritualは礼儀作法、儀式などの意味を持つ。what can he have to do with...は孔子の言いたいこと素晴らしい英語の表現といえよう。この文を日本語で言えば、。。。に関われうだろうか?。。。を云々する資格などない、といった意味になる。

3. 八佾-18

子曰、事君盡禮、人以為諂也。

事君は君につかえるとよむ、つまり事君盡禮は君に仕えるにあたり礼を尽くせば、と言う意味だ、諂はへつらいで文字通り「へつらう」ことを意味する。君主に仕えるにあたり、適切な礼を尽くせば、人はへつらっているという、(残念なことだ)と言う意味になる。英訳では The Master said, Were anyone today to serve his prince according to the full prescriptions of ritual, he would be thought a sycophant. となり、ここに出てくる sycophant は文字通りへつらうという形容詞である。英訳ではわざわざ today, 今日 という言葉を入れ、孔子が今の世（当時の世）を嘆いている、としている。

3. 八佾-26

子曰、居上不寬、為禮不敬、臨喪不哀、吾何以觀之哉

八佾で引用する最後の節である。この説も孔子さんが実の伴わない人の行動を嘆く文だ。居上不寛は人の上に立ちながら寛でない、Waley氏は narrow view を待つ人と訳している。臨喪不哀は喪に臨みながら哀悼の意を持たない人、この哀悼の意の英訳に reverence という語を当てている。これは神に対する尊敬の意を表す言葉だ。こういう人々に、吾何以觀之哉、つまり吾何を以ってこれらの人を観るべきかと嘆いている。この文の英訳は These are things I cannot bear to see としている。この文章も近頃の間は。。。と注釈を入れると孔子さんの嘆きが聞こえてくる。全文の英訳は The Master said, High office filled by men of narrow views, ritual performed without reverence, the forms of mourning observe without grief—these are things I cannot bear to see. となっている。

(通信 昭和32年卒 34年修士)